

主 文

本件上告を棄却する。

当審における訴訟費用は被告人の負担とする。

理 由

弁護人本渡乾夫の上告趣意について。

原判決は第一審訴訟手続の経過に徴し、第一審における被告人の弁護人は被告人に対する関係において証人Bの尋問請求は拋棄したものと推認できるとしているの
である。そして、第一審第六回公判において、本件と、第五回公判において被告人
不出頭のため分離した相被告人Aに対す事件とを併合の上裁判官が同第五回公判調
書中の前記証人の供述記載部分を被告人に読聞けたのに対し、弁護人は同証人の供
述内容に基づいて被告人に対し質問を行つていたのであるから、同証人の尋問請求
者たる弁護人としては該証人に対する取調請求の目的を達したものともしうべく、
この事情と原判決の判示する諸事情とを併せ考えれば原判決の前記判断は充分首肯
できるのである。従つて、かような場合には証拠調の決定を取消することなく且つ被
告人のため更に再びその取調をしなかつたからといつて証拠調決定を施行しない違
法があるとはいえない。（昭和二三年（れ）一一七八号同年一二月二四日第三小法
廷判決参照）論旨引用の判例は本件に適切でなく、論旨の理由のないことは明らか
である。

なお記録を精査しても本件について刑訴四一條を適用すべきものとは認められ
ない。

よつて、同四〇八条、一八一條により全裁判官一致の意見で主文のとおり判決す
る。

昭和二七年一二月一九日

最高裁判所第二小法廷

裁判長	裁判官	霜	山	精	一
	裁判官	栗	山		茂
	裁判官	小	谷	勝	重
	裁判官	藤	田	八	郎
	裁判官	谷	村	唯 一	郎